池田龜鑑著

古典文學論

第一書房

昭和十八年六月十五日印刷
昭和十八年六月二十日第一刷發行（三千部）

古典文學論

定價（本）三圓八十錢
特別行爲稅相當額 十五錢 合計三圓九十五錢

出文協承認
あ290117號

著作者 池田龜鑑（イケダ キカン）
東京市麴町區三番町一
刊行者 長谷川巳之吉
東京市麴町區三番町一
刊行所 第一書房
振替東京六四二二三
電話九段一四一五 三三四四

會員登錄番號
一一六五〇八

配給元 東京市神田區淡路町二丁目九番地
日本出版配給株式會社

印刷者 東京市牛込區山吹町一九八（東東三六〇）内田作之輔

＊落丁・亂丁の際は直接本社にてお取替へ致します。

目次

第一篇　古典と現代精神

一　古典と傳統……五

古典の意義（五）　古典の規定（六）　古典規定の藝術性（八）　古典規定に於ける基準（九）
傳統の意義（一〇）　日本的なるもの（一一）　文學的古典（一二）　古典への誤解（一二）　假名遣
問題（一三）　傳統の破壞（一四）　傳統の形式としての古典（一四）　生きるといふこと（一五）
精神の力（一五）　練習と鍛錬（一六）　武人的精神（一七）　大伴家持に於ける二つの面（一七）
歴史の意義（一九）　民族の生命（二〇）　古典の涵養（二一）　國語問題（二二）　古典と現代（二三）

二　文學と世界觀……二五
國家的と個人的（二五）　職城奉公（二六）　學藝の性格（二七）　團體的行動の意義（二八）　學界の大同團結（二九）　世界觀の意義（三〇）　世界觀の革新（三一）　古典研究に於ける世界觀（三一）　皇國道精神に基く世界觀（三三）　中古に於ける讃美の精神（三四）　完敎卽藝術（三五）　美しきもの卽ち尊し（三五）　厭離穢土（三六）　現世の淨土（三六）　皇室讃仰の精神（三七）　平安時代の文化（三八）　尊皇觀（四〇）　女流文學と皇室讃美（四一）　平安時代文學の特性（四三）　新しき世界觀の樹立（四四）

三　新文學への待望……四六
政治的と文學的（四六）　文學の夢（四七）　文學の基礎的地盤（四八）　文學史に於ける政治史的時期區劃（四九）　政治の性格（五〇）　現代の政治（五一）　新しき文學（五二）　國文學者の任務（五二）　傳統と因襲（五三）　中古の文化（五四）　近世の文化（五五）　傳統と革新（五六）　現代の創造性（五七）　民族的文學（五七）　大和民族の理念（五九）　民族的美心（六〇）　民族的抒情（六一）　現代の神話（六二）　抒情詩と叙事詩（六三）　家持に於ける個人性と民族性（六五）　抒情精神（六八）　民族と個人（六九）　民族的熱情（七〇）　民族的抒情と哀愁（七二）　文學に於ける經驗（七三）　體驗の歌（七五）　創造と作爲（七七）　創造的熱情（七九）　文學の素材と作者の態度（八〇）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第二篇　古典文獻學の概念

一　國文學の方法體系……八五

研究と方法體系（八五）　原典批評的研究（八六）　文學論的研究（八六）　言語學的研究（八七）
文獻學的研究（八七）　解釋的研究（八八）　方法論の成立と體系（八九）　研究とは何か（九一）
鑑賞と研究（九二）　文學の神祕性（九五）　文藝評論（九五）　解釋と解釋學（九六）　解釋の二
面（九七）　解釋に於ける妥當性（九九）

二　文獻性と文藝性……一〇一

思考と表現（一〇一）　表現の永久化（一〇一）　文獻學と文藝學（一〇三）　國文學の自己反省（一〇三）
藝術樣式と表現形式（一〇四）　蕪村の句の解釋（一〇五）　文學と思想性（一〇六）　音樂と時間性（一〇七）
繪畫と空間性（一〇九）　藝術美の綜合性（一一〇）　美的感動（一一一）　一般的美の存在（一一三）
藝術的衝動（一一四）　鑑賞と創作（一一五）　美の普遍性（一一六）　美の特殊性（一一九）　美の特殊性と
表現樣式（一二一）　美の特殊性と一般性（一二三）　文學的美の性質（一二三）　言語の性質（一二五）　美
しい言語と美しい心（一二六）　美的文獻の性格（一二七）　文學に於ける文學性と文獻性（一三一）　文字
の字體と字形（一三三）　文章と文體（一三四）　原作と飜譯（一三五）　抒情詩の特色（一三九）　抒情詩に

於ける表現上の制限(一四一)　抒情詩に於ける音樂性(一四二)　小說の特性(一四四)　文學の思想性と叙事性(一四五)　文獻の美的性質(一四七)

三　朗讀文藝と文獻性……一四九

文學的樣式の性格(一四九)　漂泊的文學(一五〇)　原始文藝の特色(一五一)　口唱的藝術(一五二)　朗讀藝術の成立(一五三)　口唱藝術の傳統(一五四)　古代の朗讀藝術(一五五)　中古の朗讀藝術(一五六)　中世の朗讀藝術(一五七)　近世以後の朗讀藝術(一五九)　會話と朗讀(一六〇)　朗讀藝術の課題(一六一)

四　文獻學の目的・性格・方法……一六二

文獻學への批判(一六二)　文獻學の概念の變遷(一六三)　文獻學の目的の二方面(一六三)　文獻學への非難一(一六四)　その批判(一六五)　文獻學への非難二(一六六)　その批判(一六七)　文獻學の無限性(一六七)　對象規定(一六九)　世界觀的立場よりの非難(一七一)　その批判(一七二)　世界觀と科學の對象(一七三)　對象規定の公理(一七四)　科學の區分と對象規定(一七五)　對象の研究と方法論(一七五)　方法論の特殊性(一七六)　方法に於ける論理學と哲學(一七七)　文獻學的陳述の具體性(一七八)　文獻學の專門的領域(一八〇)　技術學(一八一)　研究の個人性(一八一)　研究の一般性(一八二)　二者の關係(一八三)　個人差の除去(一八三)　文獻學方法論と論理學(一八四)　文獻學方法論の可能(一八五)　文獻學的處置の訓練(一八六)　文獻學と局外批評(一八七)　方法と體驗の處置(一八七)　研究の實踐と方法論(一八八)　體驗の優越性(一八九)　文獻學の任務と研究の業績(一八九)　文獻學の二大性格(一九〇)　批判と解釋(一九一)　批判と解釋の綜合(一九二)　文獻學的研究の二部門(一九二)　アルヘテイプとオ

リギナール(一九三)　歴史的諸學の方法的二部門(一九三)　文獻學方法の主觀的部面と客觀的部面(一九四)
文獻學的論理の單純性(一九五)　方法論の過信(一九六)　古典的文獻の批判的處置(一九七)　文獻學方
法論の必要(一九八)　方法と方法論(一九九)

五　解　釋……二〇〇

解釋の重要性(二〇〇)　去來の句の解釋(二〇一)　解釋一(二〇二)　解釋二(二〇三)　解釋三(二〇三)
模寫論的解釋(二〇四)　創造的解釋(二〇五)　解釋の正しさ(二〇八)　二つの解釋の性格(二〇九)　二
つの立場の混同される理由(二一〇)　理由一(二一〇)　理由二(二一二)　理由三(二一四)　解釋の二
面(二一八)　解釋に於ける勘(二一九)　文獻學に於ける解釋(二二〇)　解釋に於ける經驗の意義(二二二)
經驗の量と質(二二五)　解釋の構成(二二五)

第三篇　文學史の問題

一　文學史に於ける周期理論……二二九

「讀む」といふこと(二二九)　歴史家としての讀み(二三〇)　時期區劃の問題(二三〇)　文學の他律性
と自律性(二三一)　文學史に於ける知識と法則(二三二)　文學的展開の律動(二三三)　周期論(二三四)　ボ
ヴェの所說(二三四)　その批判(二三五)　モウルトンの周期說(二三七)　その批判(二三八)　カザミア

ンの周期說(二四一)　その批判(二四二)　文學の自律性(二四三)　時期區劃の諸方法(二四四)　時代的・個人的世界觀(二四五)　天才と環境(二四六)　影響(二四七)　時期區劃の困難(二四七)

二　國文學史の構成……二五〇

作品・作家の解說(二五〇)　時代と環境(二五二)　藤岡博士の環境論の體系(二五四)　同博士の史觀について(二五七)　史家の世界觀(二六〇)　民族的自覺(二六一)　武士道(二六二)　文學史の四部門(二六三)　環境論(二六四)　作品論(二六四)　作家論(二六四)　精神論(二六六)　國文學史の構成(二六七)　ドイツ文獻學(二六八)　古代學と文獻學(二六九)　芳賀博士と日本文獻學(二七〇)　藤岡博士の體系に於ける文獻學的性格(二七一)　世界の學としての日本文學史(二七五)

三　民族の美心……二七七

文學研究の對象(二七七)　一般美學と文藝美學(二七七)　文學の本質としての美と思想性(二七八)　美的と民族的(二八〇)　歷史的方法と文藝學(二八〇)　作品の三範疇(二八一)　歷史的方法の缺陷(二八一)　國文學の傑作の系列(二八二)　傑作研究に於ける歷史的方法の無力(二八三)　テース方法の批判(二八四)　傑作の形象(二八五)　傑作の成立(二八六)　文藝學の任務(二八六)　一般的文藝美の存在(二八七)　歷史的方法に於ける本質的ならざる評價(二八七)　美學的對象たる永遠の美(二八八)　先驗的か經驗的か(二八九)　抽象的概念と具體性(二九〇)　國家を通しての人間生活(二九一)　フランス文藝學の一般性(二九三)　民族的美心(二九三)　日本民族の美魂(二九三)　皇國道精神の顯現(二九四)

四　國民的教養としての古典の史的研究……二九五
國文學史の任務(二九五)　古典研究への無理解(二九五)　個人即國民としての生活(二九六)　文學と環境(二九七)　文學と豫言(二九七)　國文學の發生と發展(二九八)　美の系列(二九八)　永遠の文學的精神(二九八)　文學的反響(二九九)　文學史の方法の二種(二九九)　史家の直觀を主とするもの(三〇〇)　歷史的現象を主とするもの(三〇〇)　二者の批判(三〇一)　國民生活と文學(三〇二)　民族的精神と文學(三〇三)　文學史研究の必要(三〇四)　萬葉の土地についての體驗(三〇五)　文學の聯想(三〇六)　美に於ける一般性(三〇七)　美に於ける特殊性(三〇八)　西洋的方法の缺點(三〇九)　文學的史蹟についての經驗(三〇九)　歷史の聯想と文學の感化(三一一)　日本的美(三一二)　吉野山での體驗の反省(三一三)　皇國道的世界觀(三一四)　日本文學の時代的特性(三一五)　人民性と民族性(三一五)　個人的生活の過當評價(三一六)　民族的なるもの(三一七)　個人と國家(三一八)　挺身奉公(三二〇)　皇國道精神と美(三二一)　やまとごころ(三二二)　古典研究の現代的意義(三二三)
後記……三二五

古典文學論

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

古典と現代精神

古典と傳統

一

古典とは、單に古代の書籍のことをいふのではない。古典は我々の精神生活の絶えざる源泉となり、又規範となる所の典籍の謂である。

古典は、書籍と、それに立ち向ふ讀者との關係によつて成立する。卽ち古典は古書のもつてゐる精神が、讀者の世界觀によつて新生するといふ二つのもののつながりに於て、誕生するのである。例へば從來の歷史に於て、何等の注意をも拂はれなかつた一つの典籍に對して、ある人によつて新しい價値が見出され、それが貴重な作品として、廣く一般に注意されるやうになつたとしたならば、その作品はも早や單なる書籍ではなくて、立派な古典として新生したといふことになるのである。

かやうに古典の成立は讀者の關心に依存するのであるが、このことを別な言葉で云ふならば、

古典は必ずその精神が現代に生きてゐるものでなければならないのである。尤もこの生きるといふことについては愼重に考へられる必要がある。書籍はいやしくも書籍である限りに於て、決して單なる物質ではあり得ない。必ず何等かの意味に於て、精神性を具へてゐる筈である。單に紙を綴合せたものは書籍とは云はれない。何等かの意味卽ち精神の神祕性が祕められてゐてこそ書籍なのである。古書に、かやうな精神性が認められるかぎり、その古書は生きてゐるのである。しかし、かやうな意味で生きてゐるからといつて、すぐ古典だといふわけには行かない。作者の云はうとしてゐる意味が、單に理解されるといふ點のみで生きてゐるといふやうな程度に於ける書籍は、まだ古典といふわけにはいかない。ここでいふ生きるとは、もつと積極的な、又創造的な意味に於けるものである。卽ち古代の書籍の中に潛んでゐる原著者の精神が、現代の讀者の個性を通して、强い感動と、深い感銘とをその心靈に與へ、その感化が讀者の魂の深奥に於て、常に生々とした積極的な活力として不斷に生きつづけ、その生活の一切を指導するといふ、さういふ意味での新生をさすのである。

しかし、かやうな古書の新生、古代の典籍から受ける讀者の感銘は讀者によつて必ずしも一定しない。讀者は、それぞれ時代的な環境、素質、傾向、敎養、才能等を異にし、それぞれ多少づつの相違のある世界觀をもつてゐる。特に時代性といふものは、個人の世界觀の機構の中に根强く擴がつてゐるのであつて、いかなる人と雖も、かやうな時代精神や、時代的環境から孤立する

ことは絶對に出來ない。我々は典籍を新生せしめる、換言すれば古典を規定する、重要な主體的條件の一として、個人の世界觀の內部に擴つてゐる時代的意識を、如何なる意味に於ても無視することは出來ない。例へば、和歌に於て古今集が規範とされた中世と、萬葉集が尙ばれてゐる現代とを比較することによつても、古典規定に於ける「時代」の意味はきはめて容易に理解されるであらう。現代ほど古事記や、日本書紀が國民の深い關心に上つたことは嘗てなかつた事實である。我々はこの顯著な眼前の事實を見て、古典規定に於ける「時代性」の迫力を、身近かにひしひしと感じないではゐられないのである。

個人の世界觀の機構の中には、世界觀を構成する素因として、時代や環境の外に、それ等の個人のそれぞれの素質や、傾向や、教養等が數へられる。これ等の諸要素も、亦古典を規定する主體的條件となるのである。例へば近代に於て、古今集に代つて萬葉集の價値が認められるやうになつたのは、時代の先驅者として生きた正岡子規の藝術家的天分と教養とに負ふ所が多かつたのである。かうして、古典は、時代や藝術家や學者などによつて絶えず發見されるものだといふことが出來る。卽ち古典は、時代と個人とのそれぞれの共感によつて、讀者の心靈の中に、主體的に、無限に、創造されて行くものであるといふことが出來るのである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com